様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３３７０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００３２４

研究課題名（和文）近世後期における歌舞伎役者の東海地域興行に関する調査・研究

研究課題名（英文）Investigation and research on Kabuki actors' performances in the Tokai regions in the the late Edo period.

研究代表者
木村　涼（KIMURA, Ryo）

岐阜女子大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：７０５４６１５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、主に19世紀の東海地域で行われた歌舞伎役者の芝居興行について究明するものである。まず、関連する地域の博物館、資料館、図書館などを調査して資料を収集する予定であったが、新型コロナウィルスの蔓延により、調査先を限定せざるを得なかった。
　限られた調査機関で収集した資料から、芝居の開催場所、開催日数、演目、出演した役者、芝居興行を実現させた興行師などを把握することができた。また、東海地域における三都の芝居小屋に所属する歌舞伎役者と興行師の関係をより深く理解するために、「芝居興行年表」を作成している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　江戸時代、三都（江戸・京・大坂）の芝居小屋に所属している歌舞伎役者の地方興行研究については、必ずしも進展を見せている状況とは言えない。本研究は、各地域の諸機関所蔵の史資料、例えば「芝居番付」をはじめとする興行記録及び人々の評判などを分析して、地域に残存している史資料を基に歴史学的視点から地方興行を捉えようとした点に学術的意義が認められる。
　さらに、これまで十分な成果があるとは言えない歌舞伎役者と地域の人々との結びつきなどの実態について一歩ずつ解明が進められ、東海地域における人々の歌舞伎享受の一端を提示できたという点に社会的意義もある。

研究成果の概要（英文）：　This study investigates the theatrical performances of Kabuki actors mainly in the Tokai region in the 19th century. First, we planned to collect materials by surveying museums, archives, and libraries in the relevant areas, but due to the spread of the new coronavirus, we had to limit the number of research sites.
　From the materials collected at the limited number of research institutions, we were able to ascertain the location of the play, the number of days it was held, the program, the actors who performed in the play, and the showman who made the theatrical performance possible. In addition, a "Chronological Table of Theatrical Entertainments" has been created to better understand the relationship between Kabuki actors and entertainers belonging to the three metropolitan theaters in the Tokai region.

研究分野：日本近世文化史

キーワード：近世後期　東海地域　歌舞伎役者　地方興行　地域社会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）江戸時代も近世後期になると、江戸及び上方とでは興行の制度は異なるが、歌舞伎役者の三都（江戸・京・大坂）以外の地域での地方興行が一層盛んになっていく。三都の芝居小屋に所属している役者の地方興行における重要性は認識されていたにも拘わらず、歌舞伎役者の地方興行についての研究は、依然として十分に進展しているとは言えない状況がある。

（２）そこで、筆者は、岐阜女子大学に所属という環境にあるので、基盤研究（C)「五代目市川海老蔵の東海地域における芝居興行に関する調査・研究」(2017 年度～2019 年度）の成果として、五代目海老蔵（＝七代目團十郎）が関与した東海地域（本研究で定める東海地域は現在の静岡県、愛知県、岐阜県、三重県の 4 県が該当）の「五代目市川海老蔵芝居興行関係資料目録及び興行年表」を作成した。この成果は、従来の研究史は勿論、各地の「自治体史」でも網羅されていない内容も含むので、海老蔵と東海地域の芝居興行の全貌解明につながる兆しとなった。

（３）しかし、当然のことではあるが、東海地域を訪れている歌舞伎役者は、海老蔵だけではない。海老蔵が関わった芝居興行関連史資料の目録作成の段階で、海老蔵以外の三都に所属している役者が、東海地域において芝居興行を開催していることが明白となった。そこで、海老蔵以外の東海地域における歌舞伎役者の芝居興行の事例を一歩ずつだが積み重ね、地域社会との結びつきを究明していくという命題を掲げるに至った。

２．研究の目的
（１）本研究は、三都の芝居小屋に所属している歌舞伎役者の東海地域における芝居興行について考察することを目的とする。そして、歌舞伎役者の芝居興行が、地域社会の人々にどのような影響を与えたのかについても検証することを試みた。

（２）続いて、三都の芝居小屋に所属している歌舞伎役者を中心に捉える東海地域における芝居興行は、各地域において、どのような形態で行われていたのか、これまで調査してきた海老蔵の芝居興行との比較を示しながら、出演者や上演演目をはじめとする芝居興行の実態を究明していくことを目指した。

３．研究の方法
（１）本研究は、三都の芝居小屋に所属している歌舞伎役者を中心に東海地域における演劇活動について、「芝居番付」や「役者評判記」、関連地域の「自治体史」などを検証しながら、諸機関に所蔵されている他の興行関連史資料も用い、東海地域の興行の実態及び当該地域の人々との結びつきを明らかにしていくという手法を採用した。

（２）具体的作業の手始めとしては、まず、東海地域の諸機関所蔵の資料目録を精査し、関連史資料をリストアップした。そして、東海地域の「芝居番付」等の基礎的資料が揃っている早稲田大学演劇博物館から該当史料の調査・収集作業を開始し、順次、東海地域の諸機関を調査した。

４．研究成果
（１）静岡地域
　江戸時代に整備された五街道の一つである東海道には、江戸から大坂まで 57 の宿場が存在した。57 の宿場は、現在の東京、神奈川、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、大阪までの 8 地域にまたがっていた。なかでも、静岡地域には、江戸方面から数えていくと、三島、沼津、原、吉原、蒲原、由比、興津、江尻、府中、鞠子、岡部、藤枝、島田、金谷、日坂、掛川、袋井、見附、浜松、舞坂、新居、白須賀と 22 の宿場が存在していた。22 の宿場の内、見附宿及び周辺地域には、三都の芝居小屋に所属している歌舞伎役者の芝居興行の記録が、より多く見受けられた。具体的な事例を述べていきたい。
　見附宿及びその近郊地域における芸能興行の記録が『庚申掛銭帳』（磐田市歴史文書館）にみられる。『庚申掛銭帳』とは、『岩田市史　史料編 5　近世追補（2)』に所収されており、その解説によると、「江戸時代の見附宿東坂町と馬場町で行われた、二つの庚申講仲間の記録」とある。
　この『庚申掛銭帳』には、角力や芝居や寺の開帳などで賑わっている様子がみてとれる。芝居といっても、地域の人々による地芝居や芝居一座による巡業もあった。しかし、ここでは、江戸・上方役者の芝居興行に限って例を挙げていく。
　まず、①文化 3 年（1806）6、7 月頃、「江戸芝居府中掛り千本桜中あたり」との記述がある。府中宿へ赴いた江戸歌舞伎役者による「義経千本桜」の上演が大当たりをとり盛況であったことがうかがえる。この来演には次の様な経緯がある。江戸歌舞伎役者来演数ヶ月前の文化 3 年 3 月、江戸で大火が生じ、河原崎座が焼失した。したがって、この「江戸芝居」というのは、河原崎座に所属していた役者による芝居興行だったことが考えられる。しかし、具体的な役者名までは記されていなかったので、誰が来演したかは判然としない。なお、この時の河原崎座の主立っ

た役者としては、三代目坂東三津五郎、人気を誇る女形二代目小佐川常世などが出勤していた。しかし、文化 3 年、三津五郎はもともと中村座に出勤するはずであった。ところが、三津五郎と中村座による揉め事が勃発したため、三津五郎は河原崎座に出勤していた。今回、河原崎座が焼失したので、三津五郎は中村座と和睦し、5 月 7 日以降中村座に出勤することとなった。

②文化 9 年 6 月 6 日より見附近郊の岩井原にて、嵐雛助、中山あつま、嵐亀菊、浅尾五郎蔵、市野川彦四郎、二代目中山甚吉(後の三代目市川鰕十郎)などの上方役者による一座が来演した。芝居の演目は不明である。この一座による芝居はあまりの暑さだったこともあり、不入りで「大分そんと相見へ申候」との記載があった。

③文化 11 年 7 月、「江戸芝居参り、花井寸三郎、山下富蔵、嵐新平、其外いろ／＼ぼん前に参り、八月廿七日、八日時分、よふ／＼初り、東貝ニ而仕候所、一向入なく、せんしゆうらくなしニしまい申候」とある。江戸歌舞伎役者が盆前に参上し、8 月下旬より東貝にて芝居が始まったが、入りが悪いので千秋楽を待たずして終了したとのことである。

④文政 12 年（1829）、見附近郊の諸井村にて、江戸の若女形尾上菊次郎をはじめとする役者が来演したが、菊次郎以外、集客力のある役者が 1 人もいなかった。そのため、評判、芝居の入りともに全く良いところがなく、ついには芝居の請け元も逃げ出してしまう始末であった。

⑤天保 3 年（1832）7 月、見附宿宣光寺（曹洞宗珠玉山）にて「大地蔵奉加」として、江戸歌舞伎を代表する五代目市川海老蔵一座が芝居を開催した。数ヶ月前の同年 3 月、團十郎を八代目に譲り、海老蔵と改名後初の江戸以外の芝居興行である。海老蔵はじめ、一座は、市川鰕十郎、市川宗三郎（海老蔵門弟）、市川三之丞、市川銀兵衛（海老蔵門弟）、市川舛蔵（海老蔵門弟）、吾妻藤蔵等であった。なお、一座の芝居は、宣光寺において、7 月 24 日より 20 日間上演された。宣光寺境内には、常設の芝居小屋が存在した。上演演目は、「義経千本桜」「ひらかな盛衰記」「神霊矢口渡」「五大力恋緘」「一谷嫩軍記」「菅原伝授手習鑑」であった。海老蔵は、「五大力恋緘」にて源五兵衛、「一谷嫩軍記」にて熊谷次郎直実、「菅原伝授手習鑑」にて松王丸を勤め、「昔今稀なる大当り」という評価を得て、東は駿河、西は三河辺りよりの見物で大群集になった。

そして、8 月下旬、宣光寺を出発した海老蔵一座は、次に浜松宿で芝居興行を開催した。この時には、浜松の金主が、途中で逃亡するというアクシデントに見舞われた。浜松では 5 日間興行したが、9 月になって強い風のために、芝居小屋が微塵となった。それより岡崎宿に移動し芝居を開催した。この興行は大当たりで、名古屋からも夥しい見物があった。特に「菅原伝授手習鑑」と「一谷嫩軍記」は大評判であった。岡崎宿の芝居は、海老蔵一座に、上方役者の嵐三勝ほか 2、3 人を加えた興行となった。海老蔵一座が見附宿、浜松宿、岡崎宿と東海道沿いに移動した芝居興行であり、岡崎宿の芝居では、江戸の大芝居に上方役者も加わった興行となった。

なお、この時の芝居番付が「霞亭文庫」の『近世伎史　五』に収蔵されていることを発見した。宣光寺興行に関する番付は 2 枚存在する。芝居番付をみると、宣光寺という文言はなく、「遠州見付常芝居」と記されている。2 枚の番付は共に海老蔵が、「市川白猿」という俳名で、宣光寺興行に出演している。宣光寺興行では 2 枚の芝居番付が板行されたが、共に、座元が市村銀之助で、版元が尾張屋虎吉ということが判明した。

浜松の芝居番付は、「すかはら」（菅原伝授手習鑑）と記したもののみである。海老蔵は、浜松宿の興行でも宣光寺同様「市川白猿」の名で出演し、菅丞相、松王丸を勤めたと記されている。また、浜松の芝居番付に記された狂言作者は、宣光寺興行の芝居番付の版元を勤めた尾張屋虎吉で、座元は豊田屋善七であった。

岡崎宿の芝居は、「岡崎六地蔵町常芝居」であることが芝居番付からうかがえる。この芝居でも海老蔵は、「市川白猿」の名で出演している。海老蔵は、前狂言「一谷嫩軍記」にて熊谷次郎、二番目「花川戸三代男」にて幡随長兵衛、大切「所作事　市川白猿相勤申候」にて悪七兵衛景清、水うり、弁慶を勤めた。海老蔵一座に参加した上方役者の嵐三勝は、さがミ、権八、おちかを勤めた。名代は木瓜屋吉三郎、座本は、宣光寺興行同様に市村銀之助であった。

これらの資料だけでは、市川銀之助がどのような人物なのか不明確であるが、「座元」とあるので宣光寺興行、岡崎六地蔵町常芝居の興行を取り仕切っていた人物であると考えられる。

⑥天保 10 年 6 月、見附宿に上方役者の二代目尾上多美蔵（多見蔵）一座が来演した。多見蔵他、尾上多蔵、尾上梅之丞、沢村ときハ、市河仙蔵、桐嶋小六、尾上朝十郎、沢村三光、中山新九郎、浅尾実蔵他大勢参り、大当たりをとる興行となった。しかし、上演演目は判明していない。

以上 6 例が『庚申掛銭帳』にみる三都の芝居小屋に所属する歌舞伎役者の芝居興行である。

⑦文化 12 年（1815）8 月、沼津地域の木瀬川において、「江戸大芝居」を招いて興行を開催する旨の引き札が存在する。(『沼津市史　史料編　近世２』）これには、芝居の請け元の市川松兵衛、世話人の糀屋次郎八、千代邑平七、菊地屋和介、美濃屋半右衛門、田中屋権七の名がみられる。しかし実際、江戸三座に所属している役者のうちで、誰が来演したのか、具体的な一座や演目に関する記録については、現段階のところ確認できていない。

⑧八代目市川團十郎が駿河国において芝居に出演した時、贔屓が八代目の世話をした記録が見られる。それは、駿河国富士郡神谷村（吉原宿）の眼科医で海老蔵、八代目親子をはじめとする市川團十郎家の支援者である伊達家所蔵の書状にあった。現段階において、年代は正確には判定しがたい。しかし、今後関連資料を収集していけば、必ず八代目の駿河国の芝居出演の年代について特定できると思われるので、引き続き調査を進めたい。

年代は不明だが、八代目から 7 月に伊達家へ宛てた書状の中で、八代目が駿河の芝居に出演するにあたり、伊達家が、旅宿の手配や役者の面倒、種々の品々や荷物の手配、弟子への土産まで

も配慮してくれたことに対し、大変感謝していると綴っている。しかも八代目は書状の中で、駿河での芝居について、わざわざ「初旅之芝居」「初ての旅芝居」と書き記し、八代目が自身の人生における初めての旅芝居で大入り、大繁盛という結果をもたらすことができたことに対しても伊達家への感謝の意を表明していた。

なお、駿河の芝居の具体的な場所については、八代目から伊達家へ宛てた書簡の中には記されていない。しかし父海老蔵が、伊達家へ宛てた書簡の中で「八代目ふ中しはゐ大あたり」と記していることから、八代目の芝居は府中地域で開催されたものであったことがうかがえる。

八代目の江戸以外の芝居出演に関しては、これまで、嘉永 6 年（1853）6 月の甲州亀屋座と嘉永 7 年 8 月 6 日に没するおよそ 1 ヶ月前の名古屋若宮芝居の 2 回しか確認されていない。八代目の府中における芝居出演は、「初ての旅芝居」であることを強調していることから、甲州亀屋座出演の以前ということがわかる。八代目の初の江戸以外の芝居出演は、自身の中で非常に記憶に残る興行となっており、それが確認できたことは成果の 1 つと言える。

⑨東京大学国文学研究室が所蔵している芝居番付が、デジタル画像データベースで公開されている。その中に、安政 4 年（1857）4 月 2 日より駿府城下 96 か町の 1 つの梅屋町にて江戸や上方の舞台で活動した中村梅花他が出演している。座元は玉川広太夫で「小野道風青柳硯」「粧水絹川堤」「寿式三番叟」「碁太平記白石噺」「恋娘昔八丈」を上演している。

（2）岐阜地域

岐阜は、地芝居も含め元来芝居興行が盛んな地域である。なかでも、伊奈波神社は美濃地域第一の神社で、大晦日や年始、夏のみそぎ神事などの時は毎年多くの参詣客で賑わう。伊奈波神社一帯は、岐阜町周辺の最大の娯楽の場であり、江戸や上方役者が来訪して歌舞伎を上演し「因幡（稲葉）芝居」とも呼ばれた。岐阜における三都の歌舞伎役者の芝居興行の興行記録の一つである芝居番付（興行日、出演役者、演目など記載）について、最も多く確認できるのが、伊奈波神社境内の常設の芝居小屋で展開したこの「因幡芝居」である。

文化 3 年（1806）10 月には、上方を代表する役者、三代目中村歌右衛門が来演し「源平布引滝」（大序より三段目迄）で斎藤別当実盛、「隅田川続俤」にて法界坊を演じている。同じく上方役者で実悪の名人と謳われた片岡市蔵も座頭として嘉永 5 年 12 月に来演し「釜渕双級巴」（大序より釜入迄）にて石川五右衛門、「恋飛脚大和往来」（上下）にて新ノ口村孫右衛門を演じている。

江戸歌舞伎を代表する五代目海老蔵も嘉永 2 年 12 月、翌同 3 年 1 月と 2 ヶ月続けて「因幡芝居」に出演している。海老蔵は、12 月に斎藤別当実盛、幡随院長兵衛を演じ、翌年正月には「忠臣蔵裏表幕有幕無」にて五代目團十郎が引退した後に用いた「成田屋七左衛門」の名で出演し、桃井若狭之介、大星由良助、斧定九郎、飾磨宅兵へ実ハ寺岡平右衛門を演じ、いずれも大評判の舞台となっていた。因幡芝居に出演した海老蔵は、天保改革の弾圧によって江戸十里四方追放中の身であった。大好評の因幡芝居に出演中の海老蔵のもとに江戸追放赦免の知らせが届いた。海老蔵は一旦大坂へ戻り、それから江戸へ向かうこととなった。

歌舞伎役者三代目中村仲蔵の『手前味噌』には、この時、仲蔵も海老蔵と共演し、海老蔵が抜けても引き続き出演していた。ところが、海老蔵が抜けてからは、突然評判が悪くなり見物も来ず、惨憺たる有り様となってしまったとある。仲蔵は「海老飛んで跡朧なり蘆の月」という俳句を詠んでいる。

この時の海老蔵の因幡芝居興行でも、海老蔵を支えた地域の贔屓の存在が垣間見えた。海老蔵の役者としての力量は皆が認めるところであるが、狂歌・俳句・書画などにも、その才能を発揮し、旅の先々で筆を揮っている。「因幡芝居」に出演した折、戦国時代からの歴史をもつ鋳物製造業の岡本家に自筆の軸を遺している。この軸には、「壽海老人白猿」の名が記されている。「現金掛直無」と太字で力強く書かれ、「現金」と「掛直無」の間に、細字で「に春はうくひす　秋は鳫　てつぺん」という文言が挿入され、「掛直無」の左には、やはり細字で「ほとゝきす」とある。「現金掛直無」という文言が揮毫されている軸は、大変珍しく貴重である。海老蔵がこうした軸を岡本家へ遺しているということから、岡本家が海老蔵の伊奈波神社境内興行中に多大な尽力をしたであろうことがうかがえる。

（3）愛知地域

愛知や三重地域における三都に所属している歌舞伎役者の芝居興行については、静岡や岐阜地域に比べ多い。

まず、愛知の芝居興行地の筆頭として名古屋が挙げられる。名古屋には、若宮、橘町、清寿院、大須、稲荷・山王、七ツ寺、広小路などの芝居がある。また、名古屋以外では、三河地域において吉田、岡崎、三河（知立・足助）、尾張地域においては、熱田にて芝居が展開されている。

名古屋の芝居番付に関しては、本研究課題の 1 年目からコロナ禍による調査先が限定されてしまったこともあり、できることとして、まずは、芝居番付のデータベースを公開している主な諸機関の資料から調査を開始した。なお、三河地域の芝居番付に関しては、早稲田大学演劇博物館（34 件）、阪急文化アーカイブズ（3 件）、尾張地域については、早稲田大学演劇博物館（22 件）、椿亭文庫（12 件）、阪急文化アーカイブズ（4 件）などがあげられる。

そして、名古屋の芝居番付については、西尾市岩瀬文庫にも所蔵されている。これは、名古屋で興行された歌舞伎の番付を収集し綴じた史料である。人形浄瑠璃や歌舞伎以外の興行に関する摺り物も一部含まれている。歌舞伎に関しては 105 点ほどある。

鷲野文吉『尾張 名古屋 芝居番付』は、天保 15 年（1844）7 月の若宮芝居から文久 3 年（1863）11 月の清寿院芝居までの 261 枚の名古屋地域で展開された芝居番付を年代順に収めている。

また、名古屋の芝居の展開をみるうえで役者評判記も欠かすことが出来ない。三都の役者の芸評を掲載し、役者評判記の基本形となった元禄 12 年（1699）3 月『役者口三味線』から慶応 2 年（1866）正月刊行『役者金剛競』までを調査し、三都に所属している歌舞伎役者の愛知地域の芝居出演に関する記載を抽出し、芝居の評判や贔屓の意識などを考察した。

名古屋芝居のみの評判記も早いところでは、享保 17 年（1732）5 月刊行『役者名古屋帯』が存在する。名古屋版という評判記が出来るほど、上方の役者も来演し、歌舞伎が繁昌していたのは、特に、祭りや芸能を奨励した尾張藩主徳川宗春の影響もあった。上方役者は、吉田、岡崎を廻って名古屋に来演する。上方役者が名古屋での興行を終えると、岐阜や桑名を廻って京へ戻るというルートも存在した。江戸よりも上方役者の方が名古屋の芝居に出演する頻度は高い。

名古屋での芝居興行は、基本的に江戸、上方の役者、そして地役者も加わる。特に、文化 2 年（1805）8 月刊行『役者よし／＼』から文久 4 年正月刊行『役者当世競』に至るまで、これまでの役者評判記に名古屋の部が設けられることが度々あり、名古屋は三都に次ぐ歌舞伎の芝居地として、より多くの人々に認識されていることがわかる。

そして、『愛知県史』『新修　名古屋市史』『北設楽郡史』などをはじめ愛知地域の自治体史には断片的だが、江戸、上方役者の興行記録が見受けられたので、その内容をまとめている最中である。また、名古屋の芝居興行をはじめとする研究をできる限り収集し、それを元に江戸や上方役者の興行関連史料を収集し、愛知地域における興行資料所蔵目録を作成した。

（4）三重地域

三重の芝居興行地としては、まず伊勢があげられる。伊勢の歌舞伎の興行資料（古市、中之地蔵芝居、中川原芝居、常明寺芝居）の成果として、吉田映二編『新補 伊勢歌舞伎年代記』、『伊勢歌舞伎浄瑠璃年代記』（『千束屋資料調査報』第 1 輯）、『三重県史』（資料編　近世 5）・別冊の「近世三重の芝居番付一覧　―石水博物館・神宮徴古館農業館所蔵―」などが存在する。伊勢には、古市、中地蔵、松坂、一身田、津、桑名、四日市、亀山などの芝居がある。伊勢以外では、鳥羽、伊賀地域にて芝居が展開している。

『新撰古今役者大全』（寛延 3 年〈1750〉）によれば、伊勢の芝居のことを、各地域の田舎芝居に出演し、修行を積んだ上で最後に出演する「芸のしめば」としている。そして、その中でもさらに秀でた役者が、京・大坂の芝居への道が開かれたとし、伊勢の芝居での成功が、上方の大芝居への登竜門的な性格を帯びていたことを示している。江戸役者、中村仲蔵は『手前味噌』において、文政 12 年 3 月の大火によって江戸三座が焼失したため、江戸役者は芝居が不可能になり、仲蔵は、出演の場を求め旅に出て、伊勢の中地蔵の芝居へ出演したことを記している。伊勢古市、中地蔵へ向かうための経路や、芝居出演の動向など具体的に記しているので貴重な記録である。そしてまた、江戸役者の大立者、五代目松本幸四郎、三代目尾上菊五郎、七代目團十郎等も旅芝居の一環として伊勢の芝居へ出演した。

松坂の商人、森壺仙は『宝暦咄し』のなかで、「一　山田口の芝居へ市川團蔵・芳沢崎之助来り大当り　是山田へ能役者の来りはしめ也」とあり、上方から来演した両名が、山田では「良き役者」（芸の腕は勿論、集客力の高い役者）の始まりだと讃えている記録もある。

また、『三重県史　通史編　近世 2』にも記されているように、伊勢歌舞伎像の一端を知り得る伊勢千束屋歌舞伎資料については、今回詳しく調査しきれなかった。歌舞伎関連の貸衣装業の千束屋の資料約 7000 点が皇學館大學に寄贈されている。その中には特に、歌舞伎台帳が 107 点残されており、内 8 点は京・大坂で上演された大芝居の初演台帳の写しであり、その重要性については、土田衛「千束屋の歌舞伎台帳」（『伊勢歌舞伎資料調査報　第 2 号』）が指摘している。来演した歌舞伎役者が、千束屋に残された台帳を使用し、どのような演出で伊勢の歌舞伎で芝居を披露したのか、その具体像が判明すると思われるので、引き続き、千束屋歌舞伎資料については、実際現地調査を実施しつつ検討していくつもりである。

これまでは、東海地域における三都に所属している歌舞伎役者の芝居興行について、総合的な成果は見出せていなかった。しかし、今回、各所蔵機関に散在していた史資料を収集して検討した結果、東海地域の芝居興行について、開催小屋、日程、演目、役柄、共演者など具体的に把握できたことが、本研究の成果としてあげられる。この成果は、これまで言及が乏しかった三都の芝居小屋に所属している歌舞伎役者の地方興行についての研究の一端を担ったと考えられる。

以上述べてきた他にも歌舞伎役者の東海地域に関する芝居興行の事例を見出せるが、これまで収集してきた史資料を分析して、ここでは紹介しきれなかった「自治体史」の資料編や役者評判記、芝居台帳なども含め、東海地域における三都の芝居小屋に所属している歌舞伎役者の「芝居興行年表」をまとめあげ、発表の準備を進めている。

また、中村仲蔵『手前味噌』には、古市芝居に金四郎という江戸の興行師が登場する。古市でも江戸の役者の芝居に江戸の興行師が関与していることが見て取れる。さらに、岐阜の因幡芝居、名古屋の芝居の太夫本にも同一人物が度々見出せる。今後、東海地域の芝居番付に掲載された太夫本や名代についても「芝居興行年表」に組み込んで精査し、江戸・上方役者の東海地域の芝居興行にて、具体的にどのような関係性を築いていたのか、それについては今後の展望とする。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 木村　涼	４．巻 16
２．論文標題 信濃国川路興行資料のデジタルアーカイブについて ―五代目市川海老蔵の芝居台帳を素材として―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 第16回 デジタルアーカイブ研究会 論文集	６．最初と最後の頁 19～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村　涼	４．巻 17
２．論文標題 『萬根本丸本目録』と地域アーカイブ ―信州川路地域を対象として―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 第17回 デジタルアーカイブ研究会 研究会論文集	６．最初と最後の頁 45～46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村　涼	４．巻 18
２．論文標題 『根本丸本出入帳』にみる地域アーカイブ ―信州川路地域を中心として―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 第 18 回 デジタルアーカイブ研究会 研究会論文集	６．最初と最後の頁 5～8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 木村　涼
２．発表標題 静岡県富士市伊達家所蔵資料のデジタルアーカイブについて ー市川團十郎の錦絵を中心としてー
３．学会等名 デジタルアーカイブ学会 第６回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 木村　涼
２．発表標題 信濃国川路興行資料のデジタルアーカイブについて ―五代目市川海老蔵の芝居台帳を素材として―
３．学会等名 第16回デジタルアーカイブ研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 木村　涼
２．発表標題 『萬根本丸本目録』と地域アーカイブ ―信州川路地域を対象として―
３．学会等名 第17回デジタルアーカイブ研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 木村　涼
２．発表標題 歌舞伎役者市川團十郎と江戸社会
３．学会等名 タイ国立チェンマイ大学人文学部日本研究センター オンライン学術講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村　涼
２．発表標題 『根本丸本出入帳』にみる地域アーカイブ ―信州川路地域を中心として―
３．学会等名 第18回デジタルアーカイブ研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村　涼
２．発表標題 歌舞伎台帳『魁源平躑躅』とコミュニティアーカイブ
３．学会等名 デジタルアーカイブ学会 第 2回 DA フォーラム
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村　涼
２．発表標題 歌舞伎に親しむ
３．学会等名 タイ国立チェンマイ大学人文学部日本研究センター オンライン学術講演会（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関